新潮文庫

子供の四季

坪田譲治著

新潮社

子供の四季

定価170円

新潮文庫

昭和四十二年六月二十日　発行
昭和四十三年九月三十日　三刷

著者　坪田譲治
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一一一（大代）
振替　東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊟　印刷・株式会社金羊社　製本・新栄社製本所
© Jôji Tsubota 1967　Printed in Japan

新潮文庫

子供の四季

坪田譲治著

目次

春……七
若葉……四七
老会貞三……六七
晩春初夏……一〇九
善太の夏……一六九
三平の夏……二三一
牧場の秋……二七四
黄菊白菊……三〇二

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

子供部隊……三二九
晩秋初冬……三八八
雪はちらちら……四一三
子供凱歌……四三五

解説　浅見淵

子供の四季

春

「気を付けえッ。前へーおいッ」

子供たちは三平の家の門前で列び、三平の号令で出発した。銀チャンが先頭でラッパを吹いた。四月中ば朝七時、方々の山の上の畑には桃の花が咲いていた。

「プップップ――、プップップ――」

兵隊さんが一人街道を馬でやって来て、河原の方に下りてったというので、今子供たちは勇ましく進行してゆくのである。部隊総員五名、竹の鉄砲をかついだり、腰にさしたり、軍刀のように肩にあてているものもある。

ところで、小川に沿うてやって来て、大川の土手に登って見渡すと、河原には五六頭の牛がねそべって、よだれを垂らしているばかりである。いやいや、そこからずっと離れた所で、一頭の馬が背中に鞍を乗せたまま、俯向いて草を食っていた。大きな茶色の馬である。兵隊さんの姿は見えない。

「走れーい。さがせッ」

三平が大声で呼んだ。そこで何ともわからなかったが、とにかく、ワーッと、みんなは河原に向って駆け下った。だけども、

「あれえッ」
馬のそばまで行って見たのに、どこにも兵隊さんは見えないのである。キョロキョロ四方を見渡した末、
「散れえッ。散ってさがせーいッ」
の号令で、みんなは四方に散って行った。一人は草を飛び越え飛び越え、棒を空中に振って、おどるように突進したし、一人は草の頭をやっやっと右や左に打ち据えながら突き進んだ。
「へいたいさーん」
と口に手をあてて呼ぶものもあった。しかし兵隊さんはどこからも出て来なかった。ついに子供たちは乗りすてられている馬のそばに集まって、口々に評議をこらした。
「どうも、こりゃ怪しい。兵隊さんではないんだぞ」
言うものがあった。
「だって、この馬具を見ろい。将校馬具だぞ」
三平が言った。と、これについて、銀チャンが言ったのである。
「もしかしたら、悪ものがあってさ、兵隊馬を盗んでさ、それでここまで逃げてきてさ、ねッ、それから河を渡って、どこか彼方(あっち)へ行ってしまったのかも知れないぞう」
「ええッ」
これを聞くと、亀吉(かめきち)は顔色を変え、もう四辺(あたり)を見回し不安な様子を見せる。
「そんなことあるかーい」

五郎は激しく口をゆがめて、その意見に大いに軽蔑の意を表する。銀チャンに挑戦するのである。しかし、

「とにかくもう一度ラッパを吹いて見よう。兵隊さんだったら、きっと出て来るよ。兵隊さんだもの、ねえ」

鶴二郎が言った。そこで銀チャンがラッパを口にあてた。みんなは周囲に輪をつくった。プップップ――プップップ――。これにつれて、頭をゆすったり、足ぶみをしたり、はては兵隊さんがどこかから出て来はしないかとグルグルグルグル身体を回したりした。そしてそのうちみんなは疲れてしまった。と、

「あれッ」

銀チャンが首を傾けながら歩き出した。向ってゆく所は河原の遠い片隅、高い一団の草の茂った所である。そうだ。そこから一本の長靴の先が見えている。拍車が日に光っている。近くまで駆けて行って銀チャンは、草のそばからぬき足さし足、首を延ばして、草の中を覗き込む。みんなも知らず知らずぬき足、さし足首を延ばして、そちらを注目する。

「おいおい」

そこへ駆けて帰った銀チャンが声をひそめて報告したのである。

「変なお爺さんがねているんだぞう。ウンウン呻ってやがるんだぞう」

河原の隅の草の中で、変なお爺さんがウンウン呻ってねているというので、子供たちは大騒ぎを始めた。行倒れだと、一人は穢いもののように言ったが、老人を覗いて来た銀チャンの報告に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

よれば、お医者さんちのお爺さんのように白鬚を垂らし、白手袋の手には革鞭さえ持っているというのである。

「フーン。じゃ、やっぱり馬に乗って来たんだな。そして馬から落ちたんだな」

「ウーン、馬に蹴られたんだよ」

「そうだ。馬に腹を蹴られたんだよ。腹を蹴られたら、死んじまうそうだよ」

「ほうだ。きっと死ぬな。だってとしよりだもの。ねえ」

こんな有様で、評議はつきない。しかし誰一人お爺さんを見舞って、それを確かめるものはない。隊長である三平の顔を見るばかりである。そこで三平は歩き出した。しかし草のところへ来ると、彼とてもぬき足さし足。それでみんなも真似をして、二三間あとからぬき足さし足、腰を屈めて、一列になってついてゆく。

「おじいさん」

小さい声で呼んだのは、三平ではなかった。後ろの方のイタズラ小僧だ。それなのに、今まで草の中に長くのびて、フウーッ、フウーッと吐息をついていた老人が、その声で半身を起した。

「ホウ、大勢来ているな」

これに驚いた子供たちは、いっそう身体を屈めて、互いの後ろへ後ろへと身を隠した。仕方なく三平だけが立ち向った。

「お爺さん、どうしたんです?」

「おお、ありがとう、ありがとう。先刻馬から下りる時な、足のクルブシを捻挫してな」

こう言いながらも、お爺さんは痛そうに額に皺を寄せる。
「誰か大急ぎで、メリケン粉を酢で練って持って来てくれないか」
みんなはまた顔を見合せた後、三平にその日を集める。
「ボク持って来ようか」
「ウン、頼む頼む」
そこで三平は家に向って走った。大変なスピードだ。あとに従う連中も、暁の超特急のような速力である。
「お母さん、大変だ」
三平は玄関に駆け込むと呼んだ。
「えッ、どうしたの」
「ウウン、今、河原で足をくじいた人があるのさ。小麦粉を酢で練ってきてくれって。大急行だよ。だって、その人ウンウン呻ってても死にそうなんだよ」
そんな調子で、捻挫ならこの方がいいだろうとイヒチオールを渡された。そこで三平は後ろに土煙を立てて従う部隊を引きつれ、河原をさして帰って来た。
「お爺さん、とって来ましたあッ」
「ホホウ、こりゃイヒチオールだ。紙もヘラも、繃帯まで添えてある」
老人は靴をぬいで、足首に黒い薬をぬる。繃帯をして、目をつぶる。
「気のせいか、ずいぶん軽くなったようだぞ」

老人の微笑を見ると、三平は突然言ったのである。
「ボク、馬に乗りたいな」
「馬に乗りたい？　ホッホ、ホッホウ」
老人は大喜びして笑い出した。彼は馬が大好きなので、こういう子供まで好きになる。
「乗せてもいいが、まだ少し危ないな。まず馬を引いて歩きなさい」
それで三平は馬のところに行って、首にぶら下った手綱をとり、うれしそうにニコニコしながら、河原の草の中を歩き回った。子供たちもあとになり、先になりして歩いて回りながら、
「今度はボクに持たせてくれよう」
などと言うのであった。

河原の草の上を、馬の手綱をとって、三平たちは引っ張り回した。片隅の草の中から老人は眼を細くして、これを眺めていた。馬好きの彼はこの光景だけで、捻挫した足の痛みが薄れてゆく思いがした。そこへ三平たちが馬を引いて帰って来た。まず三平が言う。
「お爺さん、この馬、ずいぶんおとなしいんですね」
「ハアハアハアハア」
老人は上機嫌の大笑い。
「ボク、乗ってみようかなあ」
「フウフウフウフウ」

これも老人の笑声である。彼はもう三平を乗せる気になっていた。馬を好くものは、直ぐ自分でも好きになるのが老人の性質であった。馬を手の届く所に引いて来さすと、その轡をとって立ち上がった。手綱をとって、鬣の上に投げ上げる。

「さあてな、足が痛いかな」

そう言いながら、老人は繃帯してない左足を鐙の上に上げようとした。

「タタタタタ」

これを見ると、三平が言った。

「お爺さん、ボクたちで押し上げたげましょう。おい、みんなこい」

子供たちは集まり、老人の足を持ち、尻を押した。ワッショ、ワッショ。ウーン、ウーン。

老人は鞍の上に押し上げられ、ハアハア、ハアハアと大笑いである。鞍の上に跨ると、

「さあ来い。乗せてやるぞう」

みんな顔を見合せたが、やはり三平の優先権が認められ、

「それ、この手につかまって——」

と、老人の出した手につかまると、友達が総がかりで、尻を押し上げた。老人の前に跨って、ニコニコすると、みんなも思わず、

「バンザーイ」

と手を上げた。そしてまた二人が乗ってゆく馬の前後を何か口々に呼びながら、戦争のように棒を振って駆け回った。老人はその間を馬上静かに河原を一回りし、一周が終ると、

「さあ、シッカリ鞍の前を掴んでいるんだぞ。少し走らせて見るからね」
老人は舌を鳴らせた。手綱をしゃくった。馬は軽く駆け出した。
「やあ、競走々々」
子供たちは大騒ぎだ。馬は牛のねている周囲を回ったり、河の水の浅い所へはいって行ったりした。ザブザブ、水沫が飛び散った。ところが、その時、土手の方から三平の兄善太の声が聞えて来た。
「オーイ、三平チャン――」
「三平くん、善チャンが呼んでるぞう」
老人は馬をとめた。三平はすべり下りた。土手の方に走ってゆく。
「何だい。兄チャン」
「お父さんが帰って来いって、馬なんかに乗せてもらっちゃいけないって」
「ええ、つまんないなあ」
三平は今まで味わったこともない喜びの中にあった。不平満々で家に駆けつけた。
「お父さん――、何で馬に乗っちゃいけないの」
お父さんはむずかしい顔をしていて、お母さんがとりなすように言うのである。
「三平チャン、どんな人に乗せてもらったの」
「ウン、髯の長い、洋服のお爺さん」
「フーン」

「どうしたの」
「何でもないけど、馬は危ないからね。もうその人が乗せてやろうたって、乗せてもらうんじゃありませんよ」
「ウン、だけど、その人悪い人？　母さんの知ってる人？」
「いいえ」
しかしどうも三平にはわからない。こんなことをお父さんお母さんが言ったことは一度もない。スゴスゴ街道の方へ出てゆくと、お爺さんはもう馬に乗って町の方へ帰っていた。

馬に乗って、河沿いの峠道を、町の方へ帰ってゆく老人を、三平は遠くから見送ったのである。何しろ、不思議な老人である。
「お爺さん――」
と呼んで見ようかと思ったけれども、お母さんの言葉は老人に近よってはならないことを暗示していた。それで、お爺さんが峠を彼方(あっち)へ越して、見えなくなるまで、三平は街道に立っていた。帰って来ると、兄の善太がお母さんに話していた。
「お母さん、馬のお爺さんがイヒチオールを返しましたよ。お礼を言ってくれって。それからこの次の日曜、三平にお土産(みやげ)を持って来てくれるって」
「へえ、お爺さん、何も知らないからねえ」
この言葉は三平の注意をひかずにいなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com